

レイチェル・カーソンの宗教的ヒューマニズム… 『沈黙の春』 出版五十周年を記念して

コニー・ラッシャー

前川健一 訳

1 はじめに

二〇一二年は、ある一冊の本が出版されてから五十周年にあたる記念の年である。一九六二年に出版されたこの本が、現代の環境運動を先導したことは、広く認識されている。その本は『沈黙の春』⁽¹⁾であり、その著者はレイチェル・カーソンである。「彼女が発した数千語によって、世界は新しい方向に踏み出した」⁽²⁾と言われている。『沈黙の春』はカーソンの最晩年に世に出たものであるが、それから五十年を経た今日、改めて彼女が遺したものの意義を理解しようという関心が生

じている。その理由の一端は、リサ・サイデリスとキヤスリーン・ディーン・ムーアが編纂した見事な論文集『レイチェル・カーソン——遺産と挑戦』の序論で編者二人が述べていることからうかがえる。「現代的な意味では、レイチェル・カーソンは、環境問題専門家になったわけでもなく、環境問題ジャーナリストになったわけでもない。『沈黙の春』は、殺虫剤の危険性を詳細に報告し、見境のない使用に対してはつきりと警告を発したことで、彼女が熟知し最も愛したジャンルの作品からは、多くの点で離れるものであったのである」⁽³⁾。「レイチェル・カーソンの全人格、彼女の仕事

の全体、彼女の地球観の全体」を顕彰することの重要性は、サイデリスとムーアだけでなく、この控えめで、にもかかわらず勇敢な女性が遺したものに触発され人生と仕事に大きな変化を生じた人々（私自身を含め）にとって、分かり切ったことである。歴史的・文化的・宗教的文脈における、全体性というこの遺産こそ、本稿での研究が伝えようとするものに他ならない。

しかし、カーソンの生涯と世界観に対して「宗教的ヒューマニズム」という用語を適用するのは適当なのであろうか。確かに、この言葉は、彼女自身が使ったものではない。この問題を考える上で、本誌 (*The Journal of the Oriental Studies*) そのものが前提としている当のもの、すなわちそれが焦点としている主題の範囲の中に、こうした用法を正当化する最初の手掛りを見出せる。その主題の範囲の輪郭を描けば、以下のようにになる。それは、『法華経』の思想の普遍性、東西哲学の比較研究、生命科学と宗教、人権と宗教、女性と宗教、環境問題と宗教、社会倫理における宗教の役割などといったものである。レイチェル・カーソンが遺したも

のがこうした主題に含まれるものと交錯することは、驚くべきことであり、それは我々の研究を提示するにあたって、一つの枠組みを与えてくれるほどである。というのも、我々は次のことを心にとめておかねばならないからである。

彼女は積極的な環境運動の活動家であったが、それは環境運動という考え方が存在するよりも前のことであった。彼女は倫理学者であったが、他の倫理学者たちが彼女を自分たちの一員と認めるには長い時間が必要であった。彼女は女性であったが、その時代、科学と公務は男性に独占されていた。彼女は科学者であったが、自ら癌によって死に瀕しながら、彼女の時代の偉大な「科学的達成」の一つであった殺虫剤に対し、それを見境なく使用することに警告を発した。結局、彼女は一人の人間であった。一人の人間として、海辺にたえずみ、この世界の美と神秘に感謝を抱いていたのである。⁽¹⁾

彼女の生涯にわたる幅広い業績に生命を吹き込み、それを一貫性のあるものにしていくスピリチュアルな世界観と彼女自身の哲学を一言で要約するなら、「宗教的ヒューマニズム」と言つてよい。この言葉は不自然でもなければ不正確というわけでもないが、この表現が適切であることを理解するためには、彼女固有の文化的背景がどのようにして生み出されてきたかを説明する必要がある。こういうわけで、まずは、彼女に影響を及ぼした西洋の宗教・哲学の趨勢について、必要な範囲で要点を見てみよう。アメリカ宗教史の母体となる入り組んだ状況の中に彼女は生まれ落ちたが、これについても述べるであろう。これによって、今日、全世界で『沈黙の春』の著者として記憶されている物静かな女性的情熱と生涯を宣揚することを目的とする、以下の研究の中で、カーソンの「宗教的ヒューマニズム」の意義を、本誌が現在にいたるまで掲げているテーマとの関係で考えることができるであろう。

2 カーソンの宗教的ヒューマニズムを 取り巻く文化的状況

レイチェル・カーソンの生涯と後世への影響を記述するにあたり、「宗教的ヒューマニズム」という用語を使うことが、どのような意味で正当だと言えるのだろうか？ おそらく、この問いに対する最も直接的な答えを手短に示すには、本誌の読者にとって馴染みの名前を引き合いに出すのが好都合というものだろう。それは、ラルフ・ウォルド・エマーソンとジョン・デューイである。これから見るように、レイチェル・カーソンの性格と心性は、若い時期の文化的状況と教育環境の中で形成されたのであるが、それらを生み出す種子となったり、目に見えるかたちで影響を与えたものは、アメリカの超絶主義者たちであり、デューイの哲学が主役を演じた進歩主義運動であった。しかし、エマーソンやデューイを正しく理解するためには、アメリカにおいて彼ら自身の背景にあった宗教の歴史に言及することが不可欠である。その宗教の歴史のただ

中に、レイチェル・カーソンは生まれ、若い時期、家族のもとで、その宗教の歴史に直面したのである。こういうわけで、カーソンの「宗教的ヒューマニズム」が「宗教的」であるのは、単に超絶主義者たちの残した影響やデューイ自身の宗教的ヒューマニズムの⁽⁵⁾ような仕方では「宗教的」というのではない。それは、アメリカ的な伝統のもとでプロテスタントがたどった複雑な発展の近くにおいて、それを受け継いでいるという点でも「宗教的」なのである。

(1) アメリカにおけるカルヴァン派・ピューリタンという背景——「原野の神秘主義」

レイチェル・カーソンは、長老派教会と深く結びついた家族の中に生まれた。長老派教会は、プロテスタントの一派であり、ヨーロッパの宗教改革者ジャン・カルヴァンの直系である。カーソンの祖父は、長老派の牧師であり、彼女の母は（長老派の）ワシントン女子神学校で、厳格な古典的教科課程で教育を受けた。⁽⁶⁾カルヴァン派は、キリスト教的神信仰の一形態を代表す

るものであり、プロテスタントによる宗教改革の、ややもすれば完全な逆説ともなるものを生み出してきた。よく知られているように、カルヴァン派の特徴として、神の「至高性」（絶対的超越）と、人間の条件である「墮落」（罪）を強調する。しかし、耳を疑う人もいるかもしれないが、カルヴァン派では同時に、次のような重要な神学的理解を主張している。すなわち、「（聖霊の内的証言）」として知られる教義を通じて）神的なものは、自然及びキリスト教信者個人の両方の中に、実在しており直接的である（内在している）ということである。⁽⁷⁾この後者の側面は、キリスト教的神信仰の一つの重要な次元を示しており、それこそがカーソンが子ども時代に体験したものであった。これから見るように、カルヴァン派の伝統における自然に関する神学の理解と、アメリカという背景のもとでのその多様な展開とは、神信仰の一つの方向性を代表しているが、それによって、自然世界との交流を通じて神的なものに人間が触れ合うことに一定の正当性が確保されたのである。

ピューリタンの時代（十七世紀）から超絶主義の登場

(十九世紀)にいたるまでを含む、アメリカにおけるプロテスタントの社会的・宗教的な歴史は、広大で複雑である。しかし、カルヴァン派の神学的傾向は、明らかに対極に立つこの二つのものを、普通に考えれば思いもかけぬような仕方で結び付けている。おそらく、見たところ、最も驚かされるのは、自然というものの役割であろう。特に、ニューイングランドという状況で起こった神学的発展の中で「原野」という概念が持つ文化的重要性である。ラルフ・ウォルド・エマーソンは、手紙や日記の中で、青春時代、カルヴァン派から受けた強い影響について認めているし、実際、カルヴァン派で継承された原野の概念は、ヨーロッパのロマン派的・理想主義的な思想と東洋宗教からの影響に関し、エマーソンが両者を受容するよう促し、その受用の仕方を形作ったのである。このことは、ペリー・ミラーの古典的な研究『原野への使い (*Errand into the Wilderness*)』で論証されている。ミラーは、ハーバード大学の研究者で、ニューイングランドのピューリタニズムと超絶主義を研究している。この著作の中で、自

然というものの宗教的意義が連綿と継承されていることを跡付けている。「エドワーズからエマーソンへ」と題された章で、ペリーは次のように断言している。「契約神学（そして、契約神学に反対する異端「つまり、クエーカー教徒」）からエドワーズやエマーソンにいたるまで、一貫しているものは、つぎのようなピューリタンの努力である。すなわち、物理的な宇宙の中で、眼も眩むような神性の似像に、直接的に対面し、媒介的な儀礼や儀式抜きに、そうした宇宙に見入ろうとする努力である。（中略）自らを取り巻く原野との何らかの交流を保つための方法、そして、最も没我的な仕方ですべての方法を学びたいという、ピューリタンの不断の衝動が存在していたのである」⁽⁸⁾。

魂と自然の中へ神が流出し、神が内在しているというカルヴァン派・ピューリタンの神学的理解、すなわち神が遍在しているという感覚は、エドワーズにおける教理学的に正統的な表現から、エマーソンの超絶主義という自覚的な異端へと進化した。しかし、アメリカ・ルネサンスを主導したエマーソンとその同時代

人たちが成長した社会は、ミラーが言うように、「まだカルヴァン派の文化的刻印を残していた。というのは、神学的には既に転回が生じていたが、文化的にはまだだったのである」。それ故、エマーソンは次のような時代描写を、懐かしげに書くことができたのである。「私の少年時代、周りにいた全ての人々の生活と性格の中で、カルヴァン派はまだ力を持っており、影響力があった。それは、立ち居振る舞いや会話に、深い宗教的色合いを与えていた」⁽⁹⁾。エマーソンの生涯の中で、この生気あふれるカルヴァン派的キリスト教を代表する者として、おばのメアリー・ムーディ・エマーソン以上の者はいない。彼女は、敬虔な正統的信仰者として、自然の雄大さと美の内に「自然と啓示の唯一なる御作者」を観想するよう、自らの若い甥をうながしたのである。⁽¹⁰⁾「メアリー・ムーディ・エマーソンにおける原野の歓喜——カルヴァン派と超絶主義を結ぶ一つの環」という論文で、デイヴィッド・R・ウィリアムズが描写しているのは、エマーソンのおばが、メインにあって彼女の農場で、極めて濃密なたちで体験した自然

についての神秘主義であり、「(エマーソンに対し)都会を離れて自然の中での孤独を求め、神的なものを感じることを願って精神的な原野の中で自我を放棄するように駆り立てた」彼女の粘り強い勧めである。⁽¹¹⁾エマーソンは、「自然の中には発見を待っている聖なるものがあることを理解し」、「自然」(一八三六年)と「神学校での講演」(一八三八)で宣言する頃までには、彼がカルヴァン派の中で体験した自然についての神秘主義が、独自の知的総合へと進化したことが明白になった。それは、彼のおばなら「汎神論」といって非難せずにはすまなかったようなものであった。⁽¹³⁾

「自然と国家的自我」の中で、ミラーは次のように論じている。「自然」におけるエマーソンの思想が人々を支配し、一八五〇年から六〇年にわたる十年間、文化の領域で彼が「神として崇められた」ことは、アメリカの自己理解の転換点を画するものである。実際、「エマーソンによって、まだ明確な形をとっていなかった共同体「国民」全体の関心事が示された」。それは、自然対文明という純アメリカ的な主題であった、と。広⁽¹⁴⁾

大なアメリカの原野が、西部への拡大、都市化、工業化、功利主義的気風の増大といったものに覆い尽くされていた時、国民的なジレンマが生じていた。というのは、自然は、聖なるもの、贖罪と霊的な再生、靈感、美德、善、美、無垢といったものと文化的に深く結び付いていたからである。実際、「自然の国」というアメリカの

自己理解においては、文明の容赦ない行進と「進歩」による征服を運命づけられているように見える当の原野が、同時に国民の道徳的健康と同一視されていた。レイチェル・カーソンが生まれた頃（一九〇七年）までには、この文化的な動向は発展を続け、より濃密に、より複雑になっていた。そして、自然に対する家族のカルヴァン派的な宗教的態度と、アメリカ・ルネサンスの偉大な哲学的・文学的達成（成人してから、レイチェル・カーソンの枕元にはいつもソローの『ウォールデン』があった）の両方を、彼女は直接受け継いだのである。実際、レイチェルにこの文化的な遺産を手渡したのは、彼女の母マリア・カーソンであった。それは、彼女自身の自然学習運動への献身を通じてであった。この運

動は、この文化的・宗教的な遺産から生まれた成果であるというにとどまらず、アメリカの環境運動の歴史的発展ならびにレイチェル・カーソンの宗教的ヒューマニズムの双方にとって、無視できない意義を持つような仕方である。この文化的・宗教的な遺産を一つの形にしたのである。

（2）アメリカの自然学習運動

十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、アメリカでは、自然対文明という国民的命題に現れた道徳的ジレンマが、容易ならぬものとなりつつあった。第二次産業革命によって、工業資本主義と都市化による社会問題は深刻さの度を増した。というのも、「職場における科学と技術的合理性の結合」は、労働効率の向上をもたらしただけではなく、「生産体制の組織化にともなう、自律性の喪失と作業内容の均一化」というストレスを生み出すものでもあった。アメリカ人は「自然に目を向けた。それは、目に余るほどの官僚的文化とは異なり、生きることの喜びを増大させる、無媒介の経験を

再び手に入れるためであった⁽¹⁵⁾。自然学習運動は、進歩主義時代の社会改革という枠組みの中で出現した。それは、教育に対する進歩主義的な問題意識の基本的な特徴の一つであった。

自然学習を提唱した人々は、彼らにゆだねられた子どもたちに、現代科学の世界観を分け与えようとしたが、それと同時に、科学的探究の対象である自然^{ネイチャー}を使つて、「子どもたちの」精神的・倫理的発展を育成することを目指したのである。教育の中には、科学的探究の限界を認識することも含まれていた。そういうわけで、自然学習がもとづく世界観の核心には、自然それ自体が贖罪をもたらすという信念があった⁽¹⁶⁾。

レイチェル・カーソンが生まれた一九〇七年までには、「自然学習は、高い人気を得て、全国いたるところの学校で教えられるほどであった。運動は、多くのすぐれた知識人たちからも支持を得、専門的な学会の設

立と学問的な機関誌があることは自慢の種であった⁽¹⁷⁾。自然学習運動にとって不可欠の思想を提供した知識人の中で、特筆すべき人として、宗教的ヒューマニストであるジョン・デューイに加えて、スイスの教育家ヨハン・ペスタロッツィを挙げることができる。牧口常三郎の思想にとつて、また若き池田大作にとつて、ペスタロッツィが重要な意味を持っていたことは、よく知られている。と同時に、人間主義教育において分水嶺にあたるこの時代の変革の力は、レイチェル・カーソンの『宗教的ヒューマニズム』——幼い時期の教育内容によつて植えつけられた——と、創価学会の教育史と哲学とにとつて共通の起源なのであり、この一致は特筆すべきものである⁽¹⁸⁾。

このことは、大部分、レイチェルの母マリア・カーソンに由来するものである。彼女は、レイチェル・カーソンの伝記作者によつて、「完璧な自然学習の教師」として描写されている⁽¹⁹⁾。彼女は、巨大な分水嶺における別々の河流のように伝わってきた宗教的世界観と哲学的世界観を効果的に合流させた。それは、一国の子ど

ものの性格を形成し、道徳的發展を導くように計画された、統合的で全体的なカリキュラムという、首尾一貫した進歩主義的な教育理念へと合流したのである。こうした宗教性の河流に含まれるものの中では、キリスト教的・有神論的な「自然に関する神学」の諸命題が顕著である。それらは明らかに、自然学習の教育教材の中で、發展させられ表現されてきたものである。もちろん、工業化と都市化の病弊を最初に診断したアメリカの超絶主義者たちの知的・文学的遺産も、自然学習運動にとって無くてはならないものであったし、それはまた引き続き起こったアメリカ・ロマン主義の全般的思潮でもあった。⁽²⁰⁾さらに、公共的知識人としてのジョン・デューイの役割は、自然学習運動における重要性という点で、いくら誇張しても誇張しすぎることはない。そこには、「宗教的なもの」と「おのずからなる敬虔さ」についての哲学、経験や美的経験の哲学、科学についての全体論的な見方といったものが含まれる。事実、デューイにとって、自然学習は全体論的科学に他ならなかった。そうであればこそ、それは知識

についての全体論的な見方を伝えるだけでなく、人格の發展において関係性が十全であることが持つ倫理的重要性を完全なかたちで伝えるのである。⁽²¹⁾

レイチェル・カーソンは、幼い時から、自然学習の子として育てられた。というのも、マリア・カーソンは、自然学習運動の古典を使って彼女を教育したからである。たとえば、リバティ・ハイド・ペイリー（『自然学習の理念——自然に対する児童の共感を生み出すための新学校運動の一解釈』、一九〇三年）、アンナ・ボツフォード・コムストック（『自然学習の手引き』、一九一一年）、それに、ジン・ストットラトン・ポーターの作品をはじめとする大衆的な自然学習文献の精華といったものである。このうち、ポーターは「自然を通じて子どもは神に導かれると信じた、自然学習運動の使徒」と言われた人である。⁽²²⁾レイチェルは子ども時代を、自然の中で、母とともに過ごした。ペンシルヴァニアの家の周りに広がる森や野原や水路にいる生き物を、嬉々として探索し、熱心に研究したのであった。この時期はまた、レイチェル・カーソンが文学への愛に目覚める時であった。

彼女が愛したのは、書くことにそなわる生命を形作る力であり、それが伝える自然の驚異の世界は、彼女自身が鮮烈に経験したものであった。というのも、自然学習運動の目標には、科学教育への新たなアプローチということも含まれていた。それが目指していたのは、既成の教育システムの改革として、子どもの五感を結びつけ、「事実」を教える前に好奇心を養い、「目の前」にあるすべてのものに対する生き生きとした共感⁽²³⁾を植え付けることであった。このことは、次には、以下のような道德的目的にとって役立つものでもあった。すなわち、自然の中にいる人間以外の生き物との直接的な関わりから、自然であるとともに文化でもあると理解される地域共同体を経て、国家という生命体へと、子どもが持つ倫理的関係の範囲を拡大することである。全体論的な道德教育を通じて、健全な市民と市民としての責任感が育つという、この進歩主義的な信念、すなわち、自然学習・教育改革・民主主義の間にある重大な連関について、自然学習運動の提唱者の一人は次のように断言している、「民主主義は、大規模な自然学

習運動である⁽²⁴⁾」。レイチェル・カーソンの人生において、この大胆な理念はどの程度正しさが証明されたのだろうか。我々の研究は、次にこの問題を取り上げよう。

3 カーソンの宗教的ヒューマニズムが 後世に遺したもの

レイチェル・カーソンの「宗教的ヒューマニズム」の本質的な起源は、彼女の子ども時代にある。母の愛と献身によって与えられた、自然学習運動に基づいて、レイチェル・カーソンは、生涯の終わりに、彼女のスピリチュアルな世界観と人間主義的気風が、驚異への感受性であることを再確認している。カーソンの伝記を書いたリンダ・リアは、マリア・カーソンがレイチェルに伝えた、この「精神的遺産」について強調している。たとえば、レイチェルは母の死を悼み、友人に次のように書いている、「母は生命を愛し、全ての生き物を愛しましたが、それは彼女の並外れた美質でした。……私の知っている誰よりも、彼女は、アルベルト・シュヴァイツァーの言う「生命への畏敬」を体現した

人でした。穏やかで同情心に富んだ人でしたが、間違っていると思ったことがあれば激しく戦いました。まるで今私たちが戦いに加わっている十字軍のように！

あのことにについて彼女がどう感じていたのかが分かれば、これを完成させる上での励みになるでしょう⁽²⁵⁾。ここでカーソンが語っている「十字軍」とは、言うまでもなく、『沈黙の春』の原稿のことである。数年後、彼女の生命を奪うことになる癌と戦いながら、彼女は原稿を完成しようと奮闘していた。アルベルト・シュヴァイツァーこそが、彼女が『沈黙の春』を献呈した人物であり、出版後、彼女がシュヴァイツァーから受け取った直筆の礼状は、「彼女にとって最大の宝物」となった⁽²⁶⁾。

その後、カーソンは動物福祉協会からアルベルト・シュヴァイツァー・メダルを受賞したが、その時、「生命への畏敬」の意義について振り返り、次のように述べている、「シュヴァイツァー博士は、人間同士の関係に関わるだけでは、我々は本当の意味で文明化されたとは言えない、と語りました。重要なことは、人間と

全ての生き物との間の関係なのです⁽²⁷⁾」。大学在学中、カーソンが英文学から生物学へと専攻を変えた時、彼女は専門家としての長い旅に出発したのである。この旅の間、幼い時から受けていた全体論的な人間形成によって、彼女が行う科学調査は、「全ての生き物」にそなわる神秘を祝福するものとなった。科学者として、彼女は、自らの宗教的な人間形成やスピリチュアルな世界観が生物学者としての使命と衝突すると考えたことは一度もなかった。ジョン・デューイの哲学的影響が後世に遺したものについても言えることだが、彼女の科学者としての仕事は、「全ての生き物」という全体性を対象とする美的経験から離れることが全くない。実際、美的なものとは科学的なものを深いレベルで統合していることこそが、自然をテーマとした彼女の作品を際立たせたものとしていたのであり、それによって、『沈黙の春』は、真に人間主義的な宗教的確信を直接に訴えかけるものとなっているのである。

ここで、私たちは、カーソンの女性としてのアイデンティティと、彼女の宗教的ヒューマニズムとの合流

点に臨むのであり、男性が支配的な時代に女性として彼女が職業生活において経験した遍歴に向き合うのである。レイチェル・カーソンの人生は、強さ・人格・専門的能力の点で、お手本となるような女性に恵まれていた。自然学習運動には、有名で高い敬意を払われていた女性科学者たちがかわっていたが、カーソンは若い頃、彼女たちの著作を読んでいた。歴史的に見れば、自然学習運動と進歩主義の時代は、女性の宗教上の地位や、こうした女性が文化に対して与える創造的影響を約束するものであったが、実際のところ、このことはいまだ十分に評価されていない。ペンシルヴァニアにある現在のチャタム・カレッジの学生だった頃、彼女を教え、勇気づけた女性たちが何人かいたが、その助けによって、彼女は人生の進路を変え、生涯にわたってその道を歩んだのである。⁽²⁸⁾カーソンが生涯にわたり、女性たちの間にあって発展させた、自信と精神的なしなやかさを過小評価してはならない。というのも、『沈黙の春』の出版によって、彼女はアメリカ全土を舞台とした白熱した論争に巻き込まれ、石油化学

産業・アメリカ政府・研究大学、それに彼らを支持するおおぜいの人々といったものの内部で組織された勢力が、悪意に満ち、女性嫌悪をむき出しにして、彼女の専門的能力や人格に対して非難を浴びせた。⁽²⁹⁾カーソンがこの期間に経験した苦悶や憤り、揺らぐことのない道徳的不屈さといったものは、進行中の転移性の乳癌によって、衰弱が進んでいくことに苦しむ中で、心に抱かれたのである。彼女自身の癌との真つ向からの戦いは、公衆の目に触れることはなかった。「化学産業が彼女の病気を利用して、彼女の科学的客観性の信用を傷つけようとしないうに」と彼女が主張したからだ。「より大きな善を達成するために、彼女は沈黙を守った」、そして、ごくわずかの親友たちを除いて、全ての人々に対して病気のことを秘密にしたのである。⁽³⁰⁾リンド・リアは、自らが著した素晴らしいカーソンの伝記のために、「自然の側に立つ証人」という題名を選んだ。初期キリスト教において、「証人」を意味する語が、ギリシア語から採られ、martyr（殉教者）という教会ラテン語になったことを思い起こすなら、レイチェル・

カーソンの宗教的ヒューマニズムは、なお一層の訴求力を持つことになる。

その理由は、真に人間主義的な宗教の方向性として、彼女の総合的で全体論的な世界観は、人権と社会倫理への顧慮——完全な広がりと重要性へと発展する出発点に過ぎなかったにしても——を含意しているからである。⁽³¹⁾我々の研究から焦点を当てた場合、青春時代の自然学習によってカーソンが人間形成したことを思い起こさせるものとして、次の二点を挙げるにとどめたい。第一に、市民としての責任や市民としての権利、それに人間の自然に対する関係の意義といったことに対し、教育は不可分の関係を有するが、このことは今日では改めて関心を集めており、アメリカでは、詩人であり社会批評家であるウエンデル・ベリーのような社会的関心を持った知識人や、オリオン協会の活動などによる、民主主義の再活性化への呼びかけの中に、カーソンが遺した影響がこだましている。⁽³²⁾第二に、レイチェル・カーソンの宗教的ヒューマニズムは、驚異への感受性と人権という問題との交錯について次のよ

うなことを考えるよう、我々に要求する。自然世界の中で子どもが経験することは、スピリチュアルな面で、成長という面で、そして、道徳的に見て、どのような意義があるのか？ と。彼女が我々に遺したマニフェストは、死後出版された小さな本のための未刊の原稿であり、「子どもの好奇心を育ててあげてください」という一九五七年のエッセイをもとにしていた。⁽³³⁾しかし、一九五四年、女性ジャーナリストクラブでの招待講演で、千人近い女性の聴衆の前で、カーソンは自らの信念を語っておかなければならないと感じた、「私は次のことを信じています。私たちが美を破壊した時や、あるいは、地球にもともとあるものを、人間の作った人工的なもので置き換える時には、いつもそのたびに、人間のスピリチュアルな成長を幾分か遅らせているのです。(中略) 私たちの中には、この宇宙という自然に對して反応することが、深く根付いています。それは、私たちの人間性の一部です」。⁽³⁴⁾生涯の最後の年、彼女は自分の関心をもっとはっきりと表現している、「生命の全体性に対する子どもの意識と畏敬が発展する時にだ

け、子どもの人間性は同朋に対して完全に発揮されるのです⁽³⁵⁾」。

ここにおいて、レイチェル・カーソンの宗教的ヒューマニズムは、宗教と環境の探求の最先端に立っている。それは、普遍的な妥当性を鳴り響かせる、靈感と確言に満ちた、後世への遺産である。本誌は、エコロジ的な危機に対する全地球的な対応の中で現在、宗教が演じている役割を例示している。さらに、世界の中で際立って生氣にあふれた諸宗教伝統が再生した時、それによってもたらされる人類の統合こそが、希望をもつて未来にかかわるために必要な強さと勇気の源泉を間違ひなく提供するだろう。というのも、アメリカの偉大な環境保護活動家アルド・レオポルドがかつて記したように、自然の驚異に敏感に反応するエコロジ的な読解力とそうした人生が必然的に意味するものは、「傷ついた世界の中で」生きていることを鋭く意識することだからである⁽³⁶⁾。自然の全体性が、人間の全体性と繁栄にとって不可欠であるのと同様、自然の破壊は、子どもの健康——スピリチュアルな、心理的な、肉体的な——の発達に、しかるべき帰結をもたらす。それは、成人の社会貢献の生き方についても同じである。レイチェル・カーソンは、次のことを熱烈に信じていた。すなわち、「我々を取り囲む現実世界」においてこそ、人間は「普遍的真理」と、「生そのものの究極の神秘」に出会うのだ、と⁽³⁸⁾。彼女の宗教的な人間形成は有神論的であつたが、彼女はシュヴァイツァーに親しんでいた⁽³⁹⁾ので、彼が次のように言つた時、何を言おうとしていたのか、恐らく少しは理解したのである。生命への畏敬という思想をもたらし一瞬の洞察を思い起こしながら、シュヴァイツァーは記した、「その考えと言葉が私のもとに到来した時、それは私の考えるところのブッダから来たのだ……」⁽³⁹⁾。

4 結論

「真理（実相）」と言つても、どこか遠い別世界にあるというのではない。「諸法実相の思想は」具体的な現象（諸法）から絶対に離れず、あくまで、この具体的な現実（諸法）の真実の姿（実相）に、英知を集中させている⁽⁴⁰⁾。法

華経の思想の普遍性に対して、池田大作は生涯を捧げてきたが、それは様々な宗教的・哲学的感受性が一点に収束していくことを祝福するためであった。レイチエル・カーソンが、人気のあったカトリックの修道士で作家であったトマス・マートンから受け取った手紙のことを知っても、池田は驚くことはないだろう。彼女がその手紙を受け取ったのは、シュヴァイツァーからの大切な手紙を受け取ったのと、ほぼ同時で、どちらも『沈黙の春』を称賛するものであった。また、池田は、ヨーロッパにおける卓越したカトリック神学者が、カーソンの自然を主題とする作品に与えた評価に目もくれないということもないだろう。この神学者が師と仰いだ人物は、かつて、次のように書いた。カーソンが読んだなら、靈感を受けたような文章である。

リアリティの究極の意味へと到る旅にとっての公式は何か？ それは、リアルなものを生きることである。その知り難く神秘的な実在が見出されるという経験があることは、あらわには知られな

くとも、あること自体を否定することはできない。そうした実在は、目を開くことの中に、事物によって再び目覚めさせられた親和力の中に、事物の美しさの中に、驚嘆の中に、見出されるのであり、その経験は、感謝と安らぎ、希望に満ちている。（中略）真に、確信に満ちて、宗教的であるための唯一の条件、リアリティの意味へと到る旅にとっての公式は、リアルなものを常に、濃密に生きることである。（中略）事物との結びつきの中で、このレベルの意識を生きることが多くなれば、それだけ、リアリティのもたらす衝撃は増大し、よりよく神秘を知ることになっていくのである。⁽⁴¹⁾

レイチエル・カーソンは仏教徒ではない。青春時代にキリスト教の教会に所属して、晩年になっても、せいぜい寡黙になったというくらいのことではない。しかし、彼女は確かに「宗教的」であった。それは、デューイの宗教的ヒューマニズムの意味においてである。彼の言葉は、『沈黙の春』の出版五十周年を祝うの

にふさわしい贈り物である。

つぎのような活動は、その内容から言って宗教的である。すなわち、理想として掲げられた或る目標が、誰にとつても永続的な価値があると信じ、たとえ自らが損失を被ることが分かっているとしても、万難を排してその目標を追求するという場合である。研究者、芸術家、慈善家、一般市民、最下層の男女といった多くの人々が、でしゃばりや自己顕示とは無縁に、こうした仕方での統一を行っている、生存の諸条件と自身との間の関係を統一している。次になすべきことは、彼らの精神とインスピレーションを多くの人々に広げることである。⁽⁴²⁾

レイチェル・カーソンが世界に贈ったものは、「リアルなもの」へ、すなわち、海が語る詩や、鳥の鳴き声といったシンプルな喜びに、私たちを立ち戻らせることの中にある。死が近づいた頃、移動する蝶のはかない愛らしさに、彼女は安らぎと意味を見出していたし、

ある時には、E・B・ホワイトへの手紙に、『沈黙の春』の出版に関して、次のように書いたのだった。「ツグミの鳴き声以上に愛らしい記念碑など、私には考えられません」。

注

- (1) Rachel Carson, *Silent Spring* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1962). (邦訳、青樹肇一訳『沈黙の春』、新潮文庫)。
- (2) Paul Brooks, *Speaking for Nature: How Literary Naturalists from Henry Thoreau to Rachel Carson Have Shaped America* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1980), xvi. (邦訳、上遠恵子・北沢久美訳『自然保護の夜明け―デイヴィッド・ソローからレイチェル・カーソンへ』、新思案社) 邦訳十九頁。
- (3) Lisa Sideris and Kathleen Dean Moore, eds., *Rachel Carson: Legacy and Challenge* (Albany, NY: State University of New York Press, 2008), 2.
- (4) *Ibid.*, 3.
- (5) ジム・ガリソンは、デューイの「宗教的ヒューマニズム」が意味するものを、「日常生活における宗教の役割を尊重すると同時に、宗教否定の人間絶対主義という独断と、独断的な宗教という両極端の間の「第三の

道」を探索」することとしている（強調はラッシャー）。

法華経に示される大乘仏教の「中道」を池田大作は明確な言葉で表現しているが、それがデューイの哲学と深く一致することを論ずるガリソンの議論は有益である。下記参照。Jim Garrison, "Daisaku Ikeda and John

Dewey: A Religious Dialogue," *The Journal of Oriental Studies* 19 (2009): 147-157, 147. (邦訳「前川健一訳『池田大作とジョン・デューイ』、『東洋学術研究』一六二二〇〇九年。邦訳一三〇頁）。しかし、「我々を取り囲む宇宙」に対する「おのずからなる敬虔さ」（強調はラッシャー）というデューイの説明は、彼独自の哲学的総合を示すものである。ヨーロッパ起源の近代的神学や、ロマン主義的・理想主義的な発展、アメリカ的な同化といったものへの親近性が、言葉遣いの上に露見しているにしても。この点については下記参照。Steven C. Rockefeller, *John Dewey: Religious Faith and Democratic Humanism* (New York: Columbia University Press, 1991). (『ジョン・デューイ——宗教における信仰と民主主義的ヒューマニズム』)。

- (6) Linda Lear, *Rachel Carson: Witness for Nature* (New York: Henry Holt and Company, 1997), 10. (邦訳「上遠恵子『レイチェル——レイチェル・カーソン『沈黙の春』の生涯』、東京書籍）邦訳『レイチェル』二二二—二三頁。

- (7) カルヴァン派が有するこの複雑な面を概観する上では、以下の論文が簡潔で役に立つ。Lisa H. Sideris, "The

Secular and Religious Sources of Rachel Carson's Sense of Wonder," in *Rachel Carson: Legacy and Challenge*, 233-235. (レイチェル・カーソンの「驚異への感受性」の非宗教的源泉と宗教的源泉)。より包括的に取り扱ったものとしては、次の著作がある。Susan Schneider, *The Theater of His Glory: Nature and the Natural Order in the Thought of John Calvin* (Durham, NC: Labyrinth Press, 1991). (『神の栄光の劇場——ジャン・カルヴァンの思想における自然と自然的秩序』)

- (8) Perry Miller, *Errand into the Wilderness* (Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 1956), 184-185. (この章で言及されているのは、ジョン・サンプソン・エドワーズ (一七〇三—一七五八) である。彼は、最も偉大なアメリカの神学者であると、広く認められている。エドワーズの哲学的神学で注目されるのは、自然の中の美を感得することを強調したことである。エドワーズは、ニューイングランドのピューリタンの伝統を受けついで神学者であり、「大覚醒」として知られる信仰刷新運動に関与している)。

- (9) *Ibid.*, 200.

- (10) Mary Kupiec Cayton, *Emerson's Emergence: Self and Society in the Transformation of New England, 1800-1845* (Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press, 1989), 58. (『エマーソンの出現——変容するニューイングランドにおける自己と社会』一八〇〇年から一八四五年ま

「レ」]

- (11) David R. Williams, "The Wilderness Rapture of Mary Moody Emerson: One Calvinist Link to Transcendentalism," *Studies in the American Renaissance* (1986): 1-16, 7.
- (12) *Ibid.*, 11.
- (13) *Ibid.*, 12.
- (14) Perry Miller, "Nature and the National Ego," in *Errand into the Wilderness*, 204.
- (15) Kevin C. Armitage, *The Nature Study Movement: The Forgotten Popularizer of America's Conservation Ethics* (Lawrence, KS: University Press of Kansas, 2009), 2-3. (『自然学習運動——忘れられたアメリカ環境保護倫理の普及者』)。
- (16) *Ibid.*, 12.
- (17) *Ibid.*, 4.
- (18) 以下を参照 Takao Ito, "Readings from Daisaku Ikeda's Youth—Johann Heinrich Pestalozzi in the Early Development of Daisaku Ikeda's Educational Thought," *Soka Education* 1 (March 2008): 141-147 (伊藤貴雄「池田大作の青春時代の作品——池田大作教育思想の初期の展開におけるヨハン・ハイネリッヒ・ペスタロツィ」); Jason Goulah and Andrew Gebert, "Tsuneshuro Makiguchi: Introduction to the Man, His Idea, and the Special Issue," *Educational Studies* 45 (2009): 115-132, 119. (「牧口常三郎——その人物像 思想 特集号への序説」)。
- (19) Lear, 14. 邦訳『レイチェル』二八頁。
- (20) 上の関係についての議論は下記参照。Armitage, *The Nature Study Movement*, 45-51.
- (21) *Ibid.*, 57.
- (22) *Ibid.*, 17.
- (23) 下同をば、下記参照。Armitage, 42-70.
- (24) *Ibid.*, 65. 引用は、スタンフォード大学総長デイヴィッド・スター・ジョーダンの論文「自然学習と道徳文化」からの引用。David Starr Jordan, "Nature Study and Moral Culture," *Science* 4, no.84 (7 August 1896): 153.
- (25) Lear, 337-338. 邦訳『レイチェル』四八四頁。
- (26) *Ibid.*, 438. 邦訳『レイチェル』六四一頁。
- (27) Frank Stewart, "Small Winged Forms above the Sea: The Life of Rachel Carson," *Orion* 14 (Winter 1995): 14-18, 18. (「海の上を飛ぶ、翼ある小さなものたち——レイチェル・カーソンの生涯」)
- (28) この件に関しては、リアによる伝記「邦訳『レイチェル』」の第2章・第3章を参照された。
- (29) 下同をば、下記参照。Michael Smith, "Silence, Miss Carson! : Science, Gender, and the Reception of *Silent Spring*," in *Rachel Carson: Legacy and Challenge*, 168-187 (「カーソンさん、お静かに——科学、ジェンダー、『沈黙の春』の受容」)、リア『レイチェル』第十七章・第十八章。
- (30) *Lost Woods: The Discovered Writings of Rachel Carson*,

- edited and with an Introduction by Linda Lear (Boston: Beacon Press, 1998), 224. (邦訳、古草秀子訳『失われた森 レイチェル・カーソン 遺稿集』、集英社) 邦訳二五〇頁。
- (31) なお、サイデリスとムーアの論文集『レイチェル・カーソン——遺産と挑戦』に収録された諸論文には、この点に関して特筆すべきものがある。
- (32) 一例として、下記を参照。Richard Nelson, Barry Lopez, Terry Tempest Williams, *Patriotism and the American Land*, The New Patriotism Series, Volume 2 (The Orion Society, 2002). (『愛国主義とアメリカの土地』)。
- (33) Rachel Carson, *The Sense of Wonder* (New York: Harper & Row, 1965). (邦訳、上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』、新潮社)。
- (34) Rachel Carson, "The Real World Around Us," in *Lost Woods*, 160. 邦訳『失われた森』一八〇頁。
- (35) Ibid., 194. 邦訳『失われた森』二一八頁。(訳注)「生涯の最後の年」とあるが、引用文は、一九六〇年に執筆された「生物学を理解するために」からのもの。
- (36) Aldo Leopold, *Round River: From the Journals of Aldo Leopold* (New York: Oxford University Press, 1993), 165, quoted in Armitage, 209. (『蛇行する川——アルド・レオポルドの日記から』)。
- (37) 下記の論議を参照。Armitage, 209-215. 下記を参照。David Sobel, *Beyond Ecophobia: Reclaiming the Heart in*
- Nature Education* (The Orion Society, 1996). (『エコロジー嫌悪を超えて——自然教育の心を取り戻す』)。
- (38) Rachel Carson, *The Edge of the Sea* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1955/1998), 250. (邦訳、上遠恵子『海辺』、平河出版社) 邦訳二〇八頁。
- (39) Quoted in A. G. Rud, *Albert Schweitzer's Legacy for Education: Reverence for Life* (New York: Palgrave Macmillan, 2011), 16. (『教育に対するアルベルト・シュヴァイツァーの遺産——生命への畏敬』)。(訳注)シュヴァイツァーの自叙伝『わが生活と思想より』では、次のように記されている。「三日目の晩、日没の頃、河馬の群のあいだを舟が進んで行ったとき、突如、今まで予感もしなければ求めたこともない「生への畏敬」という言葉が心中にひらめいたのであった。——鉄扉は開けた！密林の路は見えてきた！ ついに私は、世界人生肯定と倫理とがともに包含される理念に到達したのである！」(竹山道雄訳、『シュヴァイツァー著作集』第二巻、白水社、一九二頁)。
- (40) Daisaku Ikeda, *The Wisdom of the Lotus Sutra*, Volume I, quoted in Garrison, 148. (池田大作『法華経の智慧』第一巻、聖教新聞社、二一三頁)。
- (41) Luigi Giussani, *The Religious Sense* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1997), 108-109. (『宗教的感覚』) Quoted in Garrison, 154. (訳注) John Dewey, *A Common Faith* (誰のための信仰、共通の信念)からの引用。

(訳・まえがわ けんいち／東洋哲学研究所研究員)
(Connie Lasher／米アンティオック大学
ニューイングランド校・環境研究科研究員)